

水に生まれる ——マダバの聖使徒聖堂「タラッサ」のメダイヨンと銘文——

日比生 優佳

Born in Water: The Medallion of *Thalassa* and the Inscription in the Church of the Apostles in Madaba

Yuka HIBIO

Abstract

In the Church of the Apostles in Madaba, dated to A.D.578, there is a medallion representing a personification of the sea in the center of the nave pavement. A bust of a woman emerging from the waves is accompanied by the Greek word *Thalassa* (Sea), and an inscription encircles this image. While the mosaic has been interpreted within the context of Genesis, the relation between the personified sea and the inscription without the word “sea” is still ambiguous. This study aims to explore this ambiguity. One section of the inscription reads “give life,” which could be a clue that helps interpret the panel. Pliny the Elder mentions that many creatures are nourished and proliferate in the wide open sea.

Thalassa is regarded as the successor of the sea goddess Tethys. Mosaics of this goddess have often been found in places associated with water. Tethys represents both water and the sea. According to baptism texts, the connection between water and life can be confirmed; someone who is baptized will be regenerated and refreshed by water. Oceanus, sometimes accompanied with Tethys, is also related with water and the sea. In some figures depicting the head of the ocean god, fish emerge from his hair and his beard sprouts into vegetation. This particular representation can be interpreted as water nourishing living things and increases fertility.

The link between life and the sea or water appears to have been retained during Late Antiquity. The medallion of *Thalassa* could also be associated with water and the sea as the source of life.

はじめに

マダバで最初の床モザイクが発見されて以来、ヨルダンはこの分野の研究において重要な地域となった⁽¹⁾。旧約聖書で「メデバ」として語られるマダバは、首都アンマンから「王の道」と呼ばれる古代の通商路を南下した所にある。かつて聖堂や個人の邸宅、店舗の床を飾っていた数多くのモザイクが発掘され、この地がモザイク制作の中心地のひとつであったことが明らかとなった。モザイクの多くは5世紀から7世紀に作られたが、ローマ期の作例も見

つかっている。表現された主題も多岐にわたる。ギリシア悲劇に着想を得て装飾されたヒッポリュトス・ホール（6世紀）、広範な地域と都市を示したモザイクを持つ聖ゲオルギオス聖堂（6世紀）は、共にマダバの遺跡である。これら2つの作例と並びよく知られながら、全く異なる主題を扱ったものに聖使徒聖堂の床モザイクがある。

聖使徒聖堂は1902年に発見された。身廊の床は小鳥や花、果実からなる文様のモザイクで埋め尽くされ、その中央に置かれたメダイヨンには、水から上半身を出す女性が表されている（図1）。この人

物は舵を持ち、彼女の周りには魚や蛸、空想的な海の生き物が配されている。ギリシア語で海を表す「タラッサ (ΘΑΛΑССΑ)」の銘が女性像の上方に示され、これが海の擬人像であることを見る者に伝える。この図を、寄進者らしき名を列挙した銘文が囲むが、そこに「海」という言葉は含まれていない。この銘文と海を表す図との組み合わせに関し、これまでいくつかの解釈がなされてきた。本論文も、タラッサの図と銘文との結びつきを問うものである。

5世紀後半から6世紀にかけ、古典的な擬人像は聖堂の床モザイク等に用いられた。マダバのタラッサもその一例である。ヨルダンの他の聖堂にも海にちなんだ擬人像が表されていたが、現在それらは完全な状態では残っていない⁽²⁾。聖使徒聖堂のモザイクは破損も少なく、イコノクラスム以前の美術を伝える貴重な例と言えよう。

1. 聖使徒聖堂

マダバの南東部で発見された聖使徒聖堂には身廊と2つの側廊があり、北側に2つの礼拝堂が付属している(図2)。かつて聖堂の東側にあったとされる部屋の銘文により、この建物が聖使徒(十二使徒)に捧げられたこと、および578年に完成したことが明らかとなった⁽³⁾。身廊南側の装飾帯が失われているものの、モザイクの状態は良好であり、当初のプログラムを伝えていられると思われる。

以下、各部のモザイクを見てゆく。身廊の東と西にはアンフォラと鳥、動物や樹木を用いた装飾があり、南と北には柱間のモザイクが残る。北側の柱間には幾何学模様を用いた4つのパネルがあり、南側はわずかに残る部分から、鳥や鹿を表したパネルがあったと見られる。その内側を、アカンサスの葉で作られた渦が人物や鳥、動物や果物を内包する、いわゆるインハビテッド・スクロールの装飾帯が囲むが、南側の部分は失われている。この帯の内部を埋めるのは小鳥や花、果実を幾何学的に並べた文様である。「タラッサ」のメダイオンはこの区画の中央に位置し、その直径は約2.2mである。2つの側廊には幾何学模様が使われており、北側では八角形、六角形、四角形、ひし形からなる文様が、南側では花を並べた線を交差させ、同心円と十字を組み合わせたモティーフを配した文様が用いられている。聖

堂の北側で見つかった3つのパネルは2つの礼拝堂に当たる。果樹と動物、果物を配したパネルの礼拝堂が西にあり、これと隣接した第2の礼拝堂は、段差のある床に2つのパネルを持つ。西側には4本の果樹が四隅から中央に向かって伸び、その間に対の動物を配したモザイクがある。東側の少し高くなった床には、ひし形の中に木や果物を示した文様が全面にわたって配されている。

2つの礼拝堂にはそれぞれ銘文がある。西側の礼拝堂には、主教ヨアンニスが命じ、同名の司祭ヨアンニスにより、この場のモザイクが制作されたとする銘文があり、東側の礼拝堂、果樹と動物のパネルの銘文は、この聖堂が聖使徒に捧げられたことを伝える。かつて聖堂の東側には3つの部屋があり、インハビテッド・スクロールで飾られた中央の部屋のモザイクに、聖使徒に捧げられたこの聖堂が578年に完成した旨を記した銘文があったとされる⁽⁴⁾。

この聖堂において、最も注目を集めるのは身廊の中央に置かれた、海を表すメダイオンであろう。この作例のように、ある独立したパネルを挿入した形式のモザイクはエンブレマとも呼ばれる。鳥や花から成るカーペット状の文様にはめ込まれた円の中に、水から上半身を出す女性が表され、その上方にはギリシア語で海を表す「タラッサ (ΘΑΛΑССΑ)」の文字が示されている。正面観で表され、右手を胸の前で構え、体の左側に舵を抱えたタラッサの周囲を様々な海の生き物が囲む。このメダイオンに関しては、当初の構想になく後に挿入されたという可能性も指摘された⁽⁵⁾。

メダイオンは、次の銘文で囲まれている。文はタラッサの頭上に始まり、終わる。

主よ、天と地を創りし神よ、アナスタシオス、
トマスそしてテオドラ、そしてモザイクを手
掛けたサラマニオスに生命を与えたまえ⁽⁶⁾。

寄進者らしき3名に加えてモザイク制作者の名が記され、また海を囲むよう配置された銘文でありながら、海に関する言葉を含まない点が、この銘文の特徴といえる⁽⁷⁾。

このモザイクの研究において、タラッサの図と銘文の関係は天地創造の文脈から解釈されてきた。サレーとバガッティは、銘文が天と地、そして海に言及した詩編(145: 6)に着想を得たものとし、ド

リューワーもこの考えを受け入れた⁽⁸⁾。辻佐保子は銘文が詩編の引用というよりは慣用句化した呼びかけであり、図柄との組み合わせによって天・地・海の創世記的なまとまりを成立させたと考えた⁽⁹⁾。ピッチリッロは、サレーとバガッティ同様、銘文の冒頭を詩編の引用とし、その内容は天地創造と神の力を示すものであり、神のみが寄進者に生命を与えることができると述べた。キーレリヒは、聖堂に天地創造を表すことで、世界の創造と聖堂を作る行為の同一視が行われたと考えた。マグワイアもキリストの力と天地創造の要素の結びつきを示した例として、このモザイクを解釈した⁽¹⁰⁾。以上の研究においては、創造主への呼びかけである以上、銘文に明記されずとも、天と地に加え、海も当然のこととして意識の内にあるという解釈が行われてきたといえる。

一方で、生命に満ちた海のイメージも古来、文学や美術作品に示されてきた。プリニウスの『博物誌』では、次のような記述が見られる。

海というものは広大な広がりをもち、上方から生殖のもとを受け、たえず子孫を生み続けている領域であるから、巨大量の栄養を生産している。だからそこには種子と第一原理とが、時にはこういう具合に、時にはああいう具合にと、互いにかみ合い、互いに折り合わされ、風の作用によるかと思えばこんどは波の作用によるというふうにして、現在のおびただしい数の奇妙な動物がいるのだ⁽¹¹⁾。

北アフリカに多く残る、海や魚、漁を題材とした床モザイクも、生命力豊かな海の表現と見なされる⁽¹²⁾。海の擬人像と生き物とが示された、マダバのモザイクにも同様の感覚が反映されたと筆者は考える。海の生命力に与らんと寄進者が願ったならば、海の図像は銘文前半の創造主への呼びかけよりは、後半の「生命を与えよ」という祈願の方に強く結びつくといえよう。「生命を与えよ」という文言については、再生への願いと解釈する。存命の寄進者が願う「生命」とは、死して再びよみがえることと考えられるためである。カルタゴの教父テルトゥリアヌス（160 頃 - 220 年頃）は、洗礼において水が命を与えると語った。これは水に身を浸すことによる生まれ変わり、再生を意味する⁽¹³⁾。タラッサの図

像に再生の願いを託しうるか、その可能性を探ることを本論文の目的とする。

マダバのタラッサのように、人物像の周囲に海の生き物を配した図像は、髯を生やした男性のオケアノス、女性であればテテュスの作例が多い。オケアノスは陸地を取り巻く水の流れ、テテュスはその妻で海の女神とされる⁽¹⁴⁾。これらの図像を手がかりに考察を進める。テテュス、もしくはタラッサを表したと思われる図には銘が添えられていない例もある。「タラッサ」という銘のない図に関し、本論文では便宜のため、一律にテテュスを表したものと扱うこととする。

マダバのタラッサは、テテュスを踏襲した図像と考えられてきた⁽¹⁵⁾。最初にテテュスの図像を検討し、これらが水にちなんだ場に多く配置されてきたことを確認する。テテュスおよびタラッサの図像は海だけではなく、水の表象としての面も持つと考えられる。

水と生のつながりを顕著に表す儀式として、洗礼が挙げられる。洗礼は入信の儀式であるが、水によって罪を浄化し、キリスト教においてはキリストの死と復活をなぞる意味を持つ。続く章では教父らの言説から、水による再生および海に言及したものを通覧し、当時の意識を探る。

最後に、テテュスと同様、海もしくは水を表してきたオケアノスの作例を確認する。すべての川、泉、湖はオケアノスの水を引くと考えられていたが、一方でオケアノスは動植物と一体化した姿でも表されてきた。魚など海の生き物と共にありながら、植物の葉をまとうオケアノスは生命を育み、豊穡をもたらす水の象徴と推測される。オケアノスを題材とした美術作品を検討し、この主題が単に海だけではなく、生命を生む水の表現として用いられてきたことを確認する。

以上の考察から海と水、生命の結びつきが意識されてきたことを確認し、それがタラッサの図像と銘文の組み合わせにも反映されていることを示す。

2. テテュスとタラッサ

考察に先立ち、「タラッサ」のモザイクを詳細に見ておきたい（図 3）。メダイヨンのほぼ中央に波打つ水平線が走り、海面から女性が上半身を出す。

頭上の銘から海の擬人像とわかるタラッサの周りには、空想的な海の生き物や魚、蛸が配され、海の怪獣ケートスらしき姿も背後に見える。タラッサは右腕と手首に装身具をつけているが、髪には飾りはない。

タラッサは左肩から衣を垂らし、舵を抱える。波間に隠れた衣の先がさらに続くように見えることから、この像は全身像を転用したものと推測される。舵はテテュスやオケアノス等、海に関連する神々に添えて表されることが多い⁽¹⁶⁾。タラッサは右手を胸の前で構えているが、この手がアンティオキア郊外のヤクトで出土した、「メガロプシュキア」の銘を持つ女性像の手に似ているという指摘がなされた⁽¹⁷⁾。同様のポーズをとる他の作例として、6世紀の銀皿に表された女性の座像を挙げたい（イスタンブール考古学博物館、図4）⁽¹⁸⁾。テテュスの作例は胸像が主であり、手の表現を確認できるものは少ない。銀皿の女性像の手の位置はメガロプシュキアのそれに近いが、体の左側に掛かる衣や杖の位置などに、モザイクのタラッサとの共通点が見られる。

甲殻類の鉢もしくは翼を頭につけ、海の生物に囲まれている女性はテテュス、もしくはタラッサと見なされてきた。他の作例との比較においては、上半身が表されていること、および正面観であることが、マダバのタラッサの特徴といえる。甲殻類の鉢や翼が頭部にない点も、この作例特有の表現である。1967年に聖使徒聖堂の調査を行ったルクスは、テテュスを扱ったアンティオキアのモザイクとの比較を行った⁽¹⁹⁾。アンティオキアで出土したテテュスのモザイクに関する論文を著したウェイジスは、広範囲にわたるテテュスとタラッサの作例を示した。「タラッサ」の銘を付した作例は、ウェイジスによれば3世紀末頃から始まったと考えられる⁽²⁰⁾。図像の上では判別がつかないことから、両者を分けるのは銘のみとも言える。テテュス、もしくはタラッサを表したモザイクは、両論文で列挙されたもの以外に、イスラエルで見つかった2世紀頃のヴィラのモザイク、およびスペインで発見された4世紀後半のモザイク、5-6世紀の作と思われる、不完全ながら「タラッサ」らしき銘の入ったチューリッヒ大学所蔵のメダイオン（図5）等がある⁽²¹⁾。イングランド、サマセット州のヴィラで発見された4世紀の作例は現存しないが、モザイクを記録したリトグラフが残る⁽²²⁾。モザイク以外の例では、ディ

オスコリデスの『薬物誌』写本挿絵の珊瑚（fol. 391v）の根元に、舵を手にし、ケートスに寄りかかる女性の全身像が添えられている⁽²³⁾。

水にちなんだ場所には、ヴィーナスやオケアノスなどの海に関連した神、もしくはオデュッセイアといった、海に関わる主題が配される場合が多い⁽²⁴⁾。テテュスを扱ったモザイクも、しばしば浴場に用いられ、あるいは浴槽に近い場所に置かれたと指摘されてきた。例として挙げるアンティオキア出土のパネルでは、中央に女性の肩から上が表され、その周囲を海の生き物が取り巻く。女性の額からは開いた翼が生えている。彼女の傍らには舵があり、「テテュス（THΘYC）」の銘が添えられている（図6）⁽²⁵⁾。浴槽に用いられたとされる、このテテュスのパネルは八角形であるが、これはローマ期の噴水や浴槽に見られる形であった。時代の宗教がキリスト教へと移った後も、八角形の洗礼槽は引き続き用いられ、この形と水の結びつきの深さを示す⁽²⁶⁾。

テテュスは、夫であるオケアノスと共に表されることも多い。アルメニア東部のガルニにあった、3世紀後半の浴場のモザイクには、魚の背に座るテテュスの全身像が表されている。破損により頭の一部を残すのみとなったオケアノスが隣にあり、魚やプットーが周囲に配されている⁽²⁷⁾。この作例のテテュスは、舵ではなく鏡を手に行っているように見える。

海の女神であるテテュスが水に関わりのある場に多く表されてきたことが、こうした作例から確認できる。魚などと同様、テテュスの図像は水を想起させるものであり、これと同質と思われるタラッサにも、水のイメージは反映されると考えられる。タラッサと、銘文の「生命を与えよ」という言葉の結びつきに関し、プリニウスの言葉に見られる、多種多様な生物を生み出す海の生命感に与らんとした、と考えることも可能である。その一方でテテュスおよびタラッサの図像が水を想起させる点も看過できず、さらなる検討が必要と言える。

前述のように、存命の寄進者が願う「生命」とは、死して再びよみがえることと思われる。水を通して新たな生命を得る儀式に洗礼がある。この秘跡は水と生のつながりを顕著に示すものと言える。次章において、洗礼に関する文章に語られた、生命を与える水の作用を見ることとする。同時に海に関わる記述も確認し、水と海に対する当時の意識を探る。

3. 洗礼における水と海

水に身を浸す洗礼は、信者を浄化し、死と生を経験させる。ヨルダンのネボ山にある、モーセの記念堂に付属する北の小祭室（530年）の銘文は、隣接する十字型の洗礼槽に言及しているが、それにあたって用いられたのは「再生の水槽」という言葉であった⁽²⁸⁾。パウロは生まれ変わりの洗いについて語り（テト3:5）、コンスタンティノポリス総主教であったヨアンニス・クリソストモス（344/349-407年）も、パウロのこの表現を引用したが、ネボ山の銘文の表現も、パウロの言葉を想起させるものと言える⁽²⁹⁾。以下、生命と水の関わりを探るため、洗礼に関する教父の言説を見てゆく。

創世記で語られる天地創造において、神は水を集め、それを海と呼んだ（1:10）。次いで生き物を生み出すよう水に命じる（1:20）。洗礼を扱った最初の著作とされる『洗礼について』の中で、カルタゴの教父テルトゥリアヌスは次のように述べた。

神は最初に水に対して、生き物たちを生み出すことを命じられた。原初の水が生きたものを生み出した。〔だから〕洗礼において、水が命を与えることを認識しても、それはなんら驚くべきことではないであろう⁽³⁰⁾。

この言説においては、生きるものを最初に生み出したのは水であるゆえに、洗礼の水は生命を与える力を持つとされる。水は他のあらゆる要素に先立って古く尊重すべきものであるとして、テルトゥリアヌスはその重要性と、命を与える力を強調した。

ミラノの司教アンブロシウス（340頃-397年）は、この世を海、信徒を魚になぞらえた。洗礼に関しては、水に身を浸すことは埋葬に近く、死を体験することであると語った。アンブロシウスによれば、水に沈むのはキリストと共に葬られることであり、創造の初めに生き物を生んだ如く、水は身を沈めた者を浄化し再生させる⁽³¹⁾。エルサレムのキュリロス（313頃-387年）も、洗礼は死と生を同時に経験することであると述べた。キュリロスによれば、洗礼の水は墓地でもあり、母胎でもある。キリストの死と復活をなぞることで罪が浄められ、救済

が行われる⁽³²⁾。これらの教父は、水を通して死から生に至ると語っており、水に新たな生命を与える力があると考えた様子が窺える。

カエサリアの教父バシリオス（330頃-379年）は、洗礼はキリストと共に葬られることとしながらも、水に関しては多少異なる見方を示した。洗礼を受ける者は、いわば水に埋められ、キリストの埋葬を真似るのであるが、これに生を吹き込み復活させるのは聖霊（プネウマ）の仕業である。バシリオスによれば、死のかたちを与えるのが水、命を与えるのが霊である。水に恵みがあるとしても、それは水の本性ではなく、霊によるものだとして、バシリオスは霊の聖性を強調した⁽³³⁾。モプスエスティアのテオドロス（350頃-428年）も、霊が水に働きかけた結果として、水が洗礼の場での母胎となりうると述べ、両者のはたらきを区別した⁽³⁴⁾。これらの言説においては、生命を与えるのはあくまで霊とされ、過度な水の尊重は慎重に回避された。水の、生命を与える作用を認めたテルトゥリアヌスも、水の賛美に陥らないよう慎重な姿勢を示した点においては同様であった⁽³⁵⁾。ヨアンニス・クリソストモスは、ヨハネ福音書の「だれでも水と霊によって生まれなければ、神の国を見ることはできない」（3:5）という部分の解釈において水の重要性に触れ、水は霊と共にある、必要不可欠なものであるとした⁽³⁶⁾。

生命を生み出した天地創造の水および浄化し再生する水のイメージが繰り返し語られてきたことを、洗礼に関わる言説は示している。そこでは水の浄化する作用に関する見解は共通しているものの、生命を与える力に関しては肯定・否定双方の見方がある。水と生命との結びつきは意識されていたが、入念に水の賛美を避けるのは、当時存在したという、水を過度に重視する一派を警戒する意味もあったと思われる⁽³⁷⁾。

次に、洗礼の文脈で語られる海に関し見てゆくこととしたい。最初に思い出されるのは紅海渡渉を洗礼の予型と見る言説である。複数の教父がこの点に触れており、例えばテルトゥリアヌスは水の洗い清める作用に触れたうえで、この予型について説明を行った。彼によれば、水を通じて悪が減び、民が解放されたため、このエピソードは洗礼を示す。テルトゥリアヌスは、洗礼に用いる水についても語っているが、それによれば、水にはその聖性ゆえに区別はなく、海や溜め池、川や泉、湖や浴槽のどこで洗

礼を受けようと差異は生じない⁽³⁸⁾。テルトゥリアヌスと活動の時期が重なると思われる、2世紀のサルディスの主教メリトンは、洗礼と海を直接結びつけた。

もしあなたがもろもろの天体のバプテスマされるのを見たいなら、今直ぐに大洋に出てみなさい。わたしはそこであなたに不思議な光景をお見せしよう。広がる大海、果てしない海、未知の深淵、計り知られない大洋、清い水、太陽のバプテストリー、星星に輝きを加える場所、月の浴場を。そしてこれらがいかに神秘的に浸けられるかを、わたしから忠実に学びなさい⁽³⁹⁾。

メリトンによれば、太陽、月、星々は大洋に没し、再び上昇する。太陽は一旦水に浸って輝きを消すが、新たな太陽として再び昇り、月と星々もこれに従う。メリトンはこうした天体の動きを洗礼になぞらえ、水に身を浸すことの重要性を説いた。彼によれば太陽や月、星は巨大な洗礼槽である海に没し、生まれ変わって再び姿を現す。

海に関連する、こうした記述に海水と淡水を区別する意識は見られず、どちらも浄化し生命を与える働きを持つと考えられていた様子が窺える。当時の感覚として、天地創造において生き物を生み出した水の聖性を受け継ぐ点では、どの水も同一と見られていたように思われる。

水に生命力を見出し、またその水を、海の塩水や真水等の種類では区別しない感覚の表れと考えられるものに、オケアノスの図像がある。この図像は前述のテテュスと同様、海もしくは水を表し、水に関連する場所に多く用いられてきた。中でも動植物と一体化した姿で表されたオケアノスの作例に注目し、さらに考察を進めたい。

4. オケアノス

海から姿を現すテテュスの図像と類似するものに、オケアノスを表した作例がある。様々な魚、漁師や釣り人のいる海を背景に、オケアノスの頭部のみを表したモザイクは、北アフリカに多く残る⁽⁴⁰⁾。浴場から出土した3世紀の作例では、頭に甲殻類の

鋏と珊瑚の枝をつけたオケアノスが、口の両端から水を滴らせている（テメトラ出土、スース博物館、図7）。

前述のように、多種多様な生き物をはらむ海の生命力は古来認識されており、オケアノスやテテュス、タラッサの図像をその表現ととらえることができる。しかし、これら海の主題には水を表す面もある。以下、オケアノスを題材とした美術作品を通じ、海もしくは水の、生命を生み出す表現を確認する。オケアノスとタラッサは、共に海を示す言葉でもある。先に引用したサルディスのメリトンは、太陽や月が没する様を洗礼に例えるにあたり、海に関わる様々な言葉を並べたが、その箇所を見る限り、大きな意味の違いは認められない⁽⁴¹⁾。図像の用い方に差異がないことに加え、こうした点からも、海と水を表す近似の存在と両者を見なし、考察を進めたい。

オケアノスは陸地を取り巻く水の流れであり、すべての川、泉、湖はオケアノスの水を引くと考えられた。オケアノスは川の精たちの父であり、万物の生命の源とされていたため、しばしば水によって育つ動植物と一体化した姿でも表されてきた。大英博物館所蔵になる銀皿の中心に表されたオケアノスの頭部においては、髪から海豚が姿を覗かせ、オケアノスの顎鬚は葉の形をしている（4世紀、大英博物館、図8）。イングランド、ミルデンホールで発見されたこの大皿は、オケアノスの頭部の外側を海獣とネレイデスらが囲み、貝を並べた輪を隔ててバックスやパン、ヘラクレスやマエナデスを配したものである⁽⁴²⁾。北アフリカのヴィラで発見された、「年」の擬人像アンヌスと四季を表した床モザイクでは、各辺の中央にオケアノスの頭部が置かれ、その髯が伸びてアカンサスへと変わり、規則的な渦を巻いて全体を埋め尽くす（2-3世紀、エル・ジェム博物館、チュニジア、図9）。この表現は、季節の循環がもたらす豊穡に欠かせない要素としての水を示すと考えられる⁽⁴³⁾。この頭部がオケアノスと判断されるのは、甲殻類の鋏が額にあるためである。同様の表現はイングランド、ウッドチェスターで見つかったオルフェウスのモザイク（4世紀）の装飾帯にも見られ、ここでもオケアノスの頭部が植物のスクロールの起点となっている⁽⁴⁴⁾。さらに5-6世紀には、髪の毛や眉毛、髯をアカンサスで表した男性の顔を用いた柱頭が、コンスタンティノポリス等で用いられていた。海の生き物が共に表されないものの、植

物へと変わりゆくこの顔はオケアノスと見なされてきた⁽⁴⁵⁾。甲殻類の鋏を頭から生やし、魚類と共に表されることに加え、葉や果実とも一体化したような作例に関し、グリュックは海の神であると同時にディオニュソス等の豊穡神でもある表現と考えた⁽⁴⁶⁾。こうしたオケアノスの作例は、海の生き物を養い、一方で植物を育む水の働きを象徴したものと思われる。

海洋の生物および地上の植物と一体化したテテュス、もしくはタラッサの図像は知られていない。しかしながら、生命に満ちたオケアノスの表現に近い作例は存在する。シリアで発見されたモザイクにおいて、聖使徒聖堂のタラッサとは異なり、量感を持って表されたテテュスの胸像には舵が添えられ、首には竜が巻き付く（325-350年、シャーバ博物館、図10）。彼女の髪からは魚が泳ぎだし、あるいは泳ぎ戻っているようにも見える。テテュスの背景には何も表されていないが、このパネルの外側を海と魚、船を漕ぐプットーが取り巻く。こうした作例を生命力豊かな海の表現と見ることができる⁽⁴⁷⁾。

植物を育てる水の表現に関しては、海ではなく大地がその手がかりを示す。同じ擬人像の表現であり、制作年代も近いことから、マダバのタラッサと比較し語られることの多いヨルダンのネボ山、司祭ヨアンニス礼拝堂の床モザイクに、女性の胸像として表された大地の擬人像ゲーは、果物の入った布を持つ（6世紀後半、図11）。その下方には、2尾の魚が向き合う形で置かれている。対面する魚と女性の胸像との組み合わせは、イングランド、ダラム大聖堂の所蔵になる絹の断片にも見られる⁽⁴⁸⁾。モザイクのゲーとの類似が指摘されてきた、この布の図案には、自然の女神とされる人物と果物、魚や水鳥が表されている。この2つの作例から、魚はこれら女性像に付随すると推測され、両者はその特徴から、豊穡神デア・シリアに形を得たと考えられる⁽⁴⁹⁾。デア・シリアは複数の名を持つが、この女神を表した作例のひとつと言えるアタルガティスの浮彫においては、玉座に座る豊穡の女神の足元に2尾の魚が表され、頭部に向き合う魚を載せた女神の彫刻も発見された⁽⁵⁰⁾。この女神と魚との結びつきは、豊穡とそれを支える水を表すとも推測されてきた⁽⁵¹⁾。

植物へと変わるテテュス、タラッサの作例は確認できないが、大地、豊穡の表現に添えられた魚は、

水の生命力を異なる角度から表したものと考えられる。先に引用したサルディスの主教メリトンも、洗礼の必要性を語るにあたり、大地が雨や河川の水に浸されることで、豊かな実りがもたらされると述べた⁽⁵²⁾。

髪に魚を潜ませながら植物へと発展するオケアノス、果実を抱えつつ傍らに魚を置くゲーは、おそらくは大地とそれを潤す水が不可分の存在であること、そして両者の結びつきにより、新たな生命と豊穡がもたらされることを示すのではないか。オケアノスと並行関係にあるテテュス、タラッサも同様の役割を担い、多様な海の生き物を生み出し、さらに身を浸す者を浄める。マダバの聖使徒聖堂では生命を育む海、もしくは水の表象が聖堂の中央に置かれ、そこに「生命を与えよ」という寄進者の祈りが添えられていると言えよう。

おわりに

聖使徒聖堂の「タラッサ」のメダイヨンと銘文の結びつきを探るにあたり、タラッサと同様に海を表すテテュス、およびオケアノスの図像を参照した。最初にタラッサと同質と思われるテテュスの図像が、水にちなむ場に多く配されてきたことから、この主題が単に海を表すのみならず、水の表象とも考えられることを確認した。次に洗礼が水と生命のつながりを顕著に示す儀式であることから、教父の言説の中で、この結びつきに言及したものを数点検討した。水は浄化するのみならず、生命を与える働きを持つと考えられており、海水・淡水の違いも特に意識されていなかったと推測される。水の賛美に陥るのを警戒し、距離を置こうとする動きは、当時の人々がともすれば水を讃える傾向にあったことを想像させる。最後に、時にはテテュスと共に表され、同様の場所に置かれてきたオケアノスの図像に植物と一体化したのがあることに注目し、分析を行った。海の生き物だけではなく、大地を潤し植物を育む、生命の源としてのオケアノスの表現がなされてきたことを、いくつかの作例から検証した。以上の検討により、海と水を想起させるタラッサの図像は「生命を与えよ」という願いを託すのに適切であることが確認された。

海の塩水と川や湖の淡水を区別せず、オケアノス

が魚と植物の双方を生み出す図像を用いる感覚を推し量ろうとすると、当時の世界の捉え方に思いが及ぶ。ローマの詩人ウェルギリウス（前 70- 前 19 年）は万物の父オケアノスと、地下でこれとつながるすべての川について語った。かつて、世界中の川、泉、湖はオケアノスが水源とされていた⁽⁵³⁾。あらゆる水を供給するのはオケアノスであり、その水が地下を通り、やがて野山を潤す流れや湧水となった。世界に対するこのような意識は、おそらくは洗礼について語る教父にも影響し、植物の起点となるオケアノスの柱頭彫刻が作られた 5-6 世紀に至るまで、様々な美術作品を支え続けたと推測される。無論、こうした作例がかつての意味を失い、単なる装飾と化していた可能性もあるが、水と生命に関連したタラッサやゲーが身廊の重要な位置を占めることから、本来の意味内容はまだ保持されていたとも想像される。教父たちの踏みしめる地面やこれらのモチーフが配された聖堂の下には、まだオケアノスの水脈が通っていた可能性があると言えよう。タラッサとゲーは、オケアノスから発した生命の流れを汲み、その展開として豊富な魚や果実がもたらされる。マダバの図像において、魚と中央の女性像との関係は不明瞭であるが、本来はシリアのテテュスや海を背景としたオケアノスの頭部のように、彼女の元から魚が泳ぎ出る表現だった可能性がある。生命力豊富な海として、そして身を浸す者を浄化し、新たな生命を与える水として、このメダイオンは聖堂の床の中心を占める。

初期の聖堂において、水の表現は不可欠と言える。湧水や植物の生え出るアンフォラ等の両脇に、孔雀に代表される鳥や鹿を配した「生命の泉」図像は、その代表的なものであり、聖使徒聖堂では身廊の東西に置かれたパネルにこの表現が見られる。「タラッサ」のメダイオンも、命を育む水の表現のひとつに位置づけることができよう。オケアノスを配した洗礼槽も確認されているが、海や水を想起させる図像のうち、聖使徒聖堂に置かれたのが女性像のタラッサであることに理由を見出すとすれば、生命を「生む」イメージの強調であろうか⁽⁵⁴⁾。再生を願う人々はこのメダイオンの中に立つ時、実際に水があるものとして、身を浸すような感覚を得たのかもしれないが、どちらの考えも憶測の域を出るものではない。

オケアノスの一面である、植物を育み豊穡をもた

らす部分は別の図像、すなわち葡萄蔓草をモチーフとした作例に代表される、生い茂る葉や果実に満ちたディオニュソスの主題へと連鎖する。水に関しては、オケアノスやテテュス、タラッサと同様、繰り返し表される主題として、ナイル河とその流域の風物を扱ったものが挙げられる。これらは初期の聖堂装飾において重要な主題となっている。さらに、水を用いた儀式の場である、洗礼堂の装飾についても検討が必要である。以上の題材を今後の課題としたい。

図版出典

図 1,3,10,11: Piccirillo, Michele, *The Mosaics of Jordan*, Amman, 1993

図 2: Piccirillo, Michele, *Madaba: Le chiese e i mosaici*, Torino, 1989

図 4: *Art Treasures of Turkey: Circulated by the Smithsonian Institution, 1966-1968*, exh. cat., Washington D. C., 1966

図 5: *Stiftung Koradi/Berger*, Zürich, 1989

図 6: Ed. by Stillwell, Richard, *Antioch-on-the-Orontes*, 3, Princeton, 1941, pl. 48

図 7,9: 早稲田大学文学学術院 益田朋幸教授撮影

図 8: 大英博物館ウェブサイト (The Great Dish from the Mildenhall treasure)

註

(1) 1880 年、古代都市の遺跡に入った遊牧民が偶然床モザイクを発見したことに始まる。以後、ヨルダンの他の地域でも発掘が開始された。Piccirillo, Michele, “The Mosaics of Jordan,” *Near Eastern Archaeology: A Reader*, ed. by Richard, Suzanne, Winona Lake, 2003, p. 205.

(2) ウム・アル＝ラサスの主教セルギオスの聖堂では、身廊の大部分を占めるインハピテッド・スクロールの東側中央に舵を持ったアビス（深淵）、西側に果物の入った布を手にするゲー（大地）が表されていた。同地域の「河の聖堂」にもアビスに類似した図像があったとされる。Piccirillo, Michele, *Madaba: Le chiese e i mosaici* [以下 Madaba と略記], Torino, 1989, p. 279; Idem, *The Mosaics of Jordan* [以下 Jordan と略記], Amman, 1993, p. 234, pp. 240-241; Hachlili, Rachel, *Ancient Mosaic Pavements: Themes, Issues, and Trends: Selected Studies*, Leiden/Boston, 2009, p. 180.

(3) Piccirillo, *Madaba*, pp. 96-103.

(4) Lux, Ute, “Die Apostel-Kirche in Mädeba,” *Zeitschrift*

- des Deutschen Palästina- Vereins*, 84(1968), p. 107; Piccirillo, Madaba, p. 104.
- (5) 辻佐保子『古典世界からキリスト教世界へ —舗床モザイクをめぐる試論—』岩波書店、1982年、196頁。地となる文様に別の絵をはめ込んだモザイクの場合、それぞれを異なる作り手が担当し、例えば卓越した作り手がメダイオンを、それ以外の部分を別の職人が手掛ける方法も考えられる。Dunbabin, Katherine M. D., *Mosaics of the Greek and Roman World*, Cambridge, 1999(Reprint, 2006), p. 29.
- (6) 筆者試訳。Κ[ΥΡΙ]Ε Ο Θ[ΕΟ]Σ Ο ΠΟΙΗΣΑΣ ΤΟΝ ΟΥΡΑΝΟΝ ΚΑΙ ΤΗΝ ΓΗΝ ΔΟΣ ΖΩΗΝ ΑΝΑΣΤΑΣΙΩ ΚΑΙ ΘΩΜΑ Κ[ΑΙ] ΘΕΟΔΩΡΑ ΚΑΙ ΣΑΛΑΜΑΝΙΟΥ ΨΗΦ... Kiilerich, Bente, “Visual and Functional Aspects of Inscriptions in Early Church Floors,” *Inscriptions in Liturgical Spaces*, ser. Acta ad Archaeologiam et Artium Historiam Pertinentia, 24, Roma, 2011, p. 56. ここではキーレリヒの訳に準じた。多くの研究者も同様の解釈であるが、細部に差異が見られる。最初にこの銘文を訳したヴァンサン、およびピッチリッロはサラマニオスの部分を制作者の署名として読んだ。Vincent, H., “Chronique,” *Revue Biblique Internationale*, 1902, Jerusalem, p. 599; Piccirillo, Madaba, p. 105; Idem, Jordan, p. 106. ハントは名を記した全員がモザイク作者である可能性を示した。Hunt, Lucy-Anne, “The Byzantine Mosaics of Jordan in Context: Remarks on Imagery, Donors and Mosaicists,” *Palestine Exploration Quarterly*, 126 (1994), pp. 121-122.
- (7) 銘文に「海」にあたる言葉を含み、モザイクにも海が表された例として、ギリシアのニコポリスで見つかった聖ドメティオスの聖堂、北翼廊の床モザイクが挙げられる。この作例では擬人像は用いられておらず、様々な魚の泳ぐ、海と思われる装飾帯が鳥と果樹のパネルを囲む。ここに記された銘文は「名高く果てしない大洋を (Ὠκεανόν) …」という言葉に始まる。Kitzinger, Ernst, “Studies on Late Antique and Early Byzantine Floor Mosaics I. Mosaics at Nikopolis,” *Dumbarton Oaks Papers*, 6 (1951), pp. 101-102.
- (8) Saller, Sylvester J., Bagatti, Bellarmino, *The Town of Nebo (Khirbet el-Mekhayyat) : with a Brief Survey of Other Ancient Christian Monuments in Transjordan*, Jerusalem, 1949(Reprint, 1982), p. 179; Drewer, Lois, “Fisherman and Fish Pond: From the Sea of Sin to the Living Waters,” *The Art Bulletin*, 63-4 (1981), pp. 541-542.
- (9) 辻、前掲書、256頁。
- (10) Piccirillo, Madaba, p. 105; Kiilerich, *op. cit.*, pp. 55-56; Maguire, Henry, *Nectar and Illusion: Nature in Byzantine Art and Literature*, New York, 2012, p. 21.
- (11) プリニウス『プリニウスの博物誌』1、中野忠雄他訳、雄山閣、1986年、394頁（第9巻1:2）。
- (12) 様々な生き物が生息する豊かな海の表現として、チュニジアのスースで出土した、漁の風景を表したモザイク等が挙げられる。Blanchard-Lemée, Michèle, *Mosaics of Roman Africa: Floor Mosaics from Tunisia*, 1996, New York, p. 122.
- (13) テルトゥリアヌス「洗礼について」佐藤吉昭訳、『中世思想原典集成4 初期ラテン教父』上智大学中世思想研究所、1999年、43頁（第3章4）。
- (14) Tethys はオケアノスの妻、Thetis は海の精ネレイデスの一人で英雄アキレウスの母である。両者が古くから混同される傾向にあったことをウェイジスが指摘している。Wages, Sara M., “A Note on the Dumbarton Oaks “Tethys Mosaic”,” *Dumbarton Oaks Papers*, 40 (1986), p. 126.
- (15) Piccirillo, Madaba, p. 104.
- (16) 例えばアンティオキア、「カレンダーの家」トリクリニウムに置かれたオケアノスとテテュスのモザイクでは、オケアノスが右手に舵を持つ。Wages, *op. cit.*, p. 120, pl. 2; Campbell, Sheila D., *The Mosaics of Antioch*, Tronto, c1988, pp. 60-61, pl. 179. 舵は豊穡の象徴でもあり、また指導や統治を意味する。イシスやテュケ、アフロディテ、運命の女神フォルトゥーナの持ち物でもある。Nelson Glueck, *Deities and Dolphins: The Story of the Nabataeans*, London, 1965, p. 336.
- (17) Lux, *op. cit.*, p. 119. この作例は、狩猟を主題としたモザイク中央のメダイオンに正面観の女性の胸像が表され、そこにメガロプシュキア (ΜΕΓΑΛΟΨΥΧΙΑ) の銘が添えられたものである。メガロプシュキアは左手に花籠を持ち、掲げた右手に花を載せている。このポーズに関し、ダウニーは花を投げようとする仕草と考えた。Downey, Glanville, “Personifications of Abstract Ideas in the Antioch Mosaics,” *Transactions and Proceedings of the American Philological Association*, 69 (1938), pp. 357-358, n. 19.
- (18) この女性像はインドの擬人像と考えられた。その理由は頭につけた2本の角のような飾りと、バルベリーニ象牙板 (500年頃、ルーヴル美術館) の最下段に刻まれたインドの使者のそれとが似ているためである。Rice, David Talbot, *The Art of Byzantium*, London, c1959, p. 22, p. 297,

- pl. 43; *Art Treasures of Turkey: Circulated by the Smithsonian Institution, 1966-1968*, exh. cat., Washington D. C., 1966, p. 95, pl. 155; 『トルコ文明展』(展覧会図録)、中近東文化センター、1985年、311頁、377頁、図276。
- (19) Lux, *op. cit.*, pp. 119-120.
- (20) Wages, *op. cit.*, pp. 126-128.
- (21) Edelstein, G., "En Yael-1987," *Excavations and Surveys in Israel 1988/89*, 7-8, no. 92-93 (1990), pp. 54-57; Blazquez, J. M., *Mosaicos Romanos de Cordoba, Jaen y Malaga*, ser. Corpus de Mosaicos de España, fasc. 3, Madrid, 1981, pp. 59-60, pl. 44-45; Stiftung Koradi/Berger, Zürich, 1989, pp. 48-49, 87-88.
- (22) Ed. by Page, William, *The Victoria History of Somerset*, London, 1911, p. 317, fig. 77; Jesnick, Ilona Julia, *The Image of Orpheus in Roman Mosaic: an Exploration of the Figure of Orpheus in Graeco-Roman Art and Culture with Special Reference to its Expression in the Medium of Mosaic in Late Antiquity*, Oxford, 1997, p. 145.
- (23) Weitzmann, Kurt, *Late Antiquity and Early Christian Book Illumination*, New York, 1977, pp. 68-69, pl. 19; Dioscorides, Pedanius, *Der Wiener Dioskurides: Codex medicus Graecus I der Österreichischen Nationalbibliothek*, 2, Graz, 1998, fol. 391v.
- (24) 辻、前掲書、185頁。
- (25) Wages, *op. cit.*, pp. 119-120, pl. 1; Ed. by Stillwell, Richard, *Antioch-on-the-Orontes*, 3, Princeton, 1941, p. 172, pl. 48.
- (26) イタリア、ラヴェンナの正統派洗礼堂やアルベンガの洗礼堂に八角形の洗礼槽が残る。これらに加え、ラヴェンナのアリウス派洗礼堂、ローマのラテラーノ洗礼堂は八角形の建物である。Jensen, Robin Margaret, *Living Water: Images, Symbols, and Settings of Early Christian Baptism*, 2011, Leiden/Boston, p. 244。北アフリカにも八角形の洗礼槽が見られる。辻、前掲書、428-429頁、図283。
- (27) Wages, *op. cit.*, p. 124; Brenk, Beat, *Spätantike und frühes Christentum*, Frankfurt am Main/Berlin/Wien, 1977, p. 213, pl. 221.
- (28) Di Segni, Leab, "The Greek Inscriptions," eds. by Piccirillo, Michele and Alliata, Eugenio, *Mount Nebo: New Archaeological Excavations 1967-1997*, Jerusalem, 1998, p. 430.
- (29) 聖ヨハネス・クリュソストモス『洗礼志願者のためのカテケシス』家入敏光訳、サンパウロ、2000年、60-62頁。
- (30) テルトゥリアヌス「洗礼について」佐藤吉昭訳、『中世思想原典集成4 初期ラテン教父』上智大学中世思想研究所、1999年、43頁(第3章4)。
- (31) Saint Ambrose, *Theological and Dogmatic Works*, ser. Fathers of the Church, 44, trans. by Deferrari, Roy J., Washington D. C., 1963, pp. 270-272 (The Sacraments, 2-3).
- (32) エルサレムのキュリロス「洗礼志願者のための秘儀教話」大島保彦訳、『中世思想原典集成4 盛期ギリシア教父』上智大学中世思想研究所、1992年、151頁(第二講4)。
- (33) 聖大バシレイオスの『聖霊論』山村敬訳、南窓社、1996年、108-109頁(15:35)。
- (34) 『原典 古代キリスト教思想史 2 ギリシア教父』小高毅 編、教文館、2000年、281頁。
- (35) テルトゥリアヌス、前掲書、43-44頁(第3章6)。
- (36) Saint Chrysostom, *Homilies on Gospel of St. John*, ser. A Select Library of the Nicene and Post-Nicene Fathers of the Christian Church, 14, trans. by Schaff, Philip, Grand Rapids, Michigan, 1975, pp. 87-89 (25:1-2).
- (37) 一例として、キプリアヌスは聖餐にも水を用いようとする人々に対し、懸念を示す言葉を残した。Eds. by Roberts, Alexander; Donaldson, James, *The Writings of the Fathers Down to A.D. 325*, ser. A Select Library of the Ante-Nicene Fathers, 5, Grand Rapids, Michigan, 1986-1989, pp. 358-364 (the Epistle of Cyprian, 62).
- (38) テルトゥリアヌス、前掲書、45頁(4章)、51頁(9章)。アンブロシウスやエルサレムのキュリロスも紅海渡渉を洗礼の前表とする見方に触れている。アンブロジウス『秘跡』熊谷賢二訳、創文社、1963年、44頁、82頁、113頁。エルサレムのキュリロス、前掲書、145頁(第一講3)。
- (39) メリトン「諸断片 訳と註」加納政広訳、『キリスト教教父著作集 12 初期護教論集』教文館、2010年、87頁(8b:2)。
- (40) Dunbabin, Katherine M. D., *The Mosaics of Roman North Africa: Studies in Iconography and Patronage*, Oxford, 1978, pp. 149-154.
- (41) 引用の箇所では大洋(ὠκεανόν) および海(θάλασσαν)の語が、同様に海を表す果てしない海(πέλαγος)、深淵(βυθόν)といった言葉と共に用いられている。Melito of Sardis, *On Pascha and Fragments*, ed. by Hall, Stuart George, Oxford, 1979, pp. 71-73 (Fragment 8b:2).
- (42) Toynbee, Jocelyn, M., *Art in Roman Britain*, London, 1962, pp. 169-171, pl. 117; Ed. by Weitzmann, Kurt, *Age*

- of Spirituality: Late Antique and Early Christian Art, Third to Seventh Century, exh. cat., New York, 1979, pp. 151-152.
- (43) Blanchard-Lemée, Michèle, *Mosaics of Roman Africa: Floor Mosaics from Tunisia*, 1996, New York, p. 123.
- (44) Dunbabin, Katherine M. D., *Mosaics of the Greek and Roman World*, Cambridge, 1999(Reprint, 2006), pp.92-93, fig. 92.
- (45) Rice, David Talbot, *The Art of Byzantium*, London, 1959, p. 294, pl. 32; *Art Treasures of Turkey : Circulated by the Smithsonian Institution, 1966-1968*, exh. cat., Washington D. C., 1966, p. 96, pl. 158; Kathleen Basford, *The Green Man*, Cambridge, 1978(Reprint, 2000), pp. 11-12, pls. 6a-10; Mazza, Alessandra, “La Maschera Fogliata: Una Figura dei Repertori Ellenistico-Orientali Riproposta in Ambito Bizantino,” *Jahrbuch der österreichischen Byzantinistik*, 32-5(1982), pp. 23-32; 手摺子に刻まれたオケアノスの作例もある。『トルコ文明展』(展覧会図録)、中近東文化センター、1985年、309-310頁、376頁、図261。植物と一体化した女性像としては、顔や首が葉に覆われた女神アタルガティスの彫刻を挙げることができる。ヨルダン南西部のキルベツ・タンヌールで発見されたこの浮彫では、女神の背後のパネルを花々や果物を囲む蔓草が埋め尽くし、オケアノスのモザイク(図9)とも類似した表現となっている。Nelson Glueck, *Deities and Dolphins: The Story of the Nabataeans*, London, 1965, p. 143, pls. 31, 32, 33.
- (46) Glueck, *op. cit.*, pp. 346-348.
- (47) Balty Janine, *Mosaïques Antiques de Syrie*, Bruxelles, 1977, pp. 66-68, pls. 28-29; Idem, *Mosaïques Antiques du Proche-Orient: Chronologie, Iconographie, Interprétation*, Paris, 1995, p. 66, pl. 10-2.
- (48) Flanagan, J. F., “The Figured-Silks,” *The Relics of Saint Cuthbert: studies by various authors*, ed. by Battiscombe C. F., Oxford, 1956, pp. 508-509, fig. 1; Maguire, Henry, *Earth and Ocean: The Terrestrial World in Early Byzantine Art*, Pennsylvania, 1987, fig. 85; Granger-Taylor, Hero, “The Earth and Ocean Silk from the Tomb of St Cuthbert at Durham; Further Details,” *Textile History*, 20-2 (1989), pp. 151-166, fig. 8.
- (49) 拙稿「果実と大地 —ネボ山司祭ヨアンニス礼拝堂 上部床モザイクの考察—」『WASEDA RILAS JOURNAL』、no. 2(2014)、4頁。
- (50) Glueck, *op. cit.*, p. 144, pp. 315-316, pls. 1, 2, 10a, 10b.
- (51) Benko, Stephen, *The Virgin Goddess: Studies in the Pagan and Christian Roots of Mariology*, Leiden/Boston, 2004, p. 57.
- (52) メリトン「諸断片 訳と註」前掲、87頁(8b-1)。
- (53) ウェルギリウス『牧歌／農耕詩』小川正廣訳、京都大学学術出版会、2004年、198-199頁(農耕詩第4歌365-367, 381-382)。
- (54) 洗礼槽の四隅に、首の左右から海豚をつき出したオケアノスの頭部を配した作例が、コルシカ島で発見された。辻佐保子『古典世界からキリスト教世界へ』、197頁。聖堂に表されたオケアノスの例として、魚を踏み、船と舵を手にした全身像がヨルダン南部、ペトラの聖堂の南側廊の床に見られる。Fiema, Zbigniew T., Kanellopoulos, Chrysanthos, Waliszewski, Tomasz and Schick, Robert, *The Petra Church*, Anman, 2001, p. 319, 323; Hachlili, Rachel, *Ancient Mosaic Pavements: Themes, Issues, and Trends: Selected Studies*, Leiden/Boston, 2009, p. 180, pl. VIII.1b.

図版

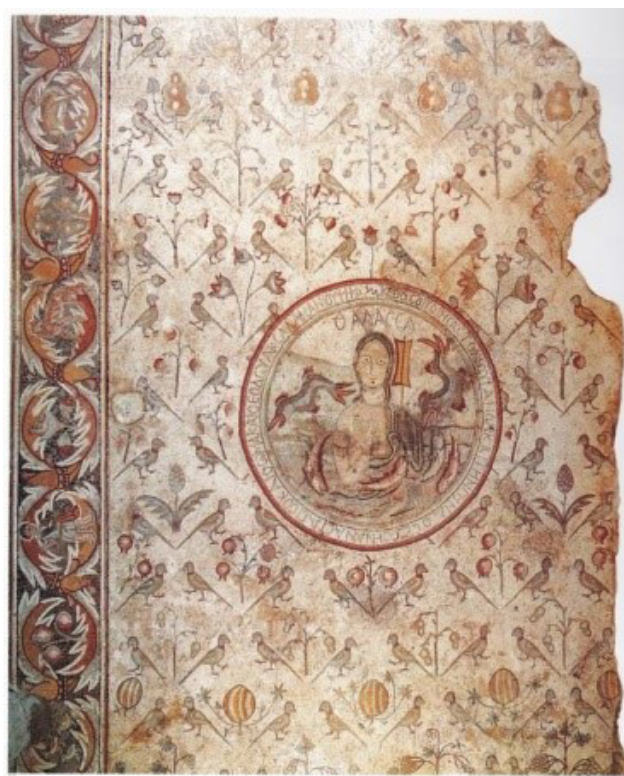


図1 聖使徒聖堂 身廊（部分）

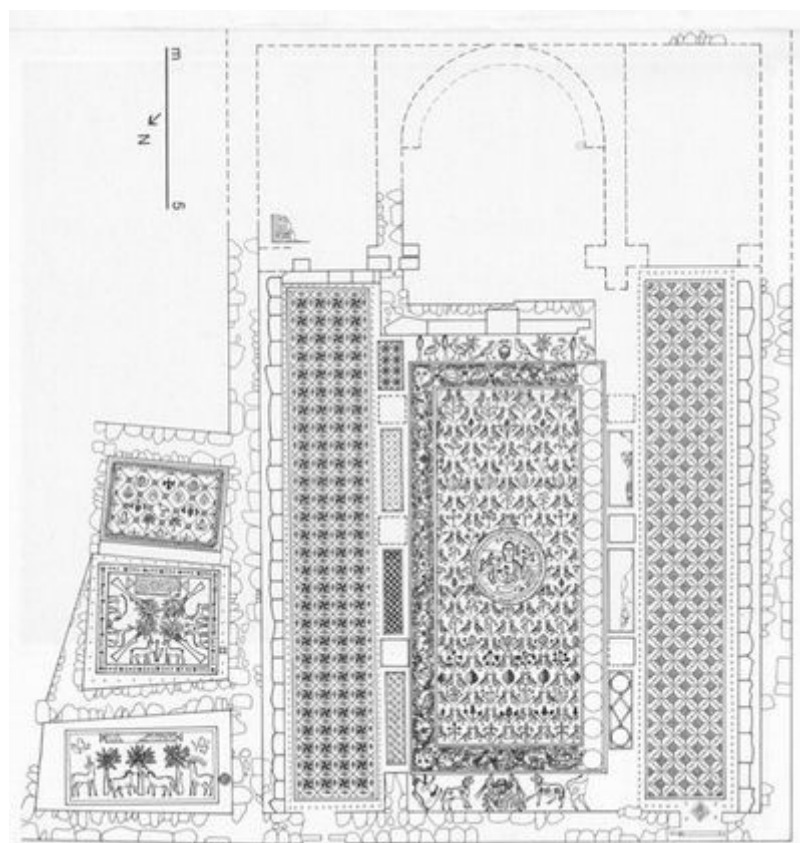


図2 平面図



図3 タラッサ



図6 テテュス アンティオキア出土



図4 銀皿 イスタンブール考古学博物館



図5 タラッサ チューリッヒ大学



図7 オケアノス スース博物館



©Trustees of the British Museum

図8 銀皿 大英博物館



図11 ゲー 司祭ヨアンニス礼拝堂



図9 オケアノス エム・ジェム博物館



図10 テテュス シャーバ博物館